現場教育イノベーション賞【作品部門】

「あじまの家」改修プロジェクト

持家一戸建

設計会社

名城大学柳沢研究室

在来木造

施工会社 (有)工作舎中村建築

リフォーム前後の写真













「あじまの家」は、宗教的な場である〈お堂〉に沿ってL字型

に生活空間が配された平屋です。生活の変化に応じて改修を重

ねた痕跡が随所に見られました。お堂と比較的状態の良い部屋

を除いた範囲を改修対象として、断熱改修・構造補強を行うと

ともに、デザイン面では次の三点を改修の基本方針としました。

③時間の蓄積の空間体験

|工夫したポイント| ②お堂の存在を感じる一室空間

①学生による施工を活かしたデザイン

開□部・設備・家具の一部を除 く工事全般を、プロの大工の指 導を受けながら、**主に学生が施 工**を行いました。素人である学生 の作業は、効率や精度の点では 不利ですが、体で建築を学ぶ楽 しみとともに、時間と手間を惜し みなくかけられるため、通常の 物件では難しい、膨大な手間の かかるデザインを実現しました。









② お堂の存在を感じる一室空間: お堂の存在を感じることができるよう、お堂の外周壁を荒々しい土壁で仕上げました。





ん の記憶を 残す軸組 第三期の増築

③ 時間の蓄積の空間体験: 床・天井・仕上げの変化により増築で継ぎ接ぎされた空間の履歴を体感する

(写真撮影: 笹倉洋平)

## リフォームの動機/設計・施工の工夫点/施主の感想・満足度 /住宅の価値を向上させた内容など

「あじまの家」は、終戦頃に建てられた木造住宅です。住宅兼 宗教団体の〈お堂〉として長く使われてきましたが、居住者の 他界により空家となりました。その子供たちは、自分たちが育っ た家であり地域の人にも親しまれてきた建物を、セカンドハウ ス兼地域に開いたサロンとして、改修・活用することにしました。

設計・施工にあたっては、様々な人に関わってほしいという 施主の思い、また木造建築について学ぶ教育的効果への期待か ら、教員及び大工の指導の下、学生が中心となって行いました。

特に配慮した事項

・構造用合板とブレースによる構造補強、基本的に一室空間としながら、広い土間や多人数で使えるアイランドキッチン・少人数で 使う畳コーナー等を設け、地域サロンとして様々な場面で利用できるように配慮した。

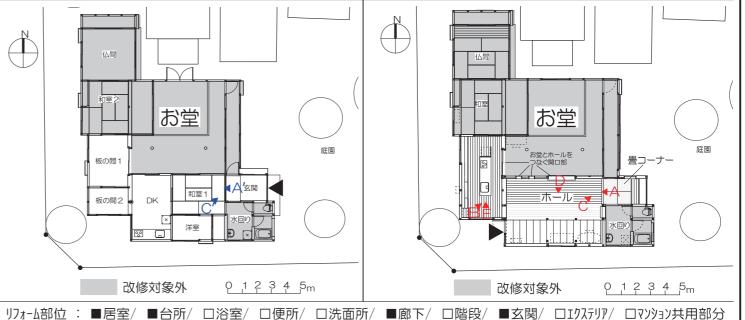
## データ

性能向上の特性

・断熱材の充填・地域環境への配慮

200日間 所在地 愛知県名古屋市 築後年数 70年 施工期間 該当工事床面積 52.00 m² / 総工事床面積 52.00 m² 該当部分工事費 900 万円 / 総工事費 900 万円 居住者構成 65歳以上: 0人、15~64歳: 4人、15歳未満: 0人、ペット:





在来木造

## 現場教育イノベーション賞【作品部門】

## 講評

長年、宗教団体の本部を兼ねて使われていた住宅が、母の他界により空き家となっていた。これを受け継いだ施主は、人が集まる場であったこの建物を壊すのはしのびないとして、地域に開いたサロン兼セカンドハウスとして活用することを考えた。あるとき「CASA BRUTUS」で素敵な古民家改装事例を発見し、その設計を行った設計事務所に相談を持ちかけた。

この事例は、ここからの展開が面白い。話を受けた設計者は、名城 大学で教鞭を執る柳沢准教授であり、彼は「施主の希望」に「コスト」 という制約条件の解決を兼ね、それに「建築教育」を掛け合わせるこ とを思いついた。そして改修を学生と一緒に行い、彼らの教育にも生 かそうというアイデアが生まれた。ただし古民家の改装は、設計も施 工も素人の学生の手に負えるものではない。工務店でありながらも現 場ワークショップなどの実績がある、工作舎中村建築の中村氏に相談 し、施工総括・技術指導にあたって頂くことの快諾を得た。

プロが一定の水準を担保しつつ、学生アイデアも盛り込んだ意匠は 独特であり、ひとことで言えば「豪快」かつ「繊細」である。

大量の人員を投入できる強みを生かした天井は、解体時の材を丁寧に洗浄、再塗装し、1枚ずつ丸太の母屋に合わせて加工した力技のデザインである。また学生が打設した大判のコンクリートタイルや、幅

9.2m×最大高さ4.7mの巨大な砂漆喰の壁は、「豪快」で見ごたえがある。一方でお堂という既存建物の非改修部分と改修部分であるホールをうまく繋ぎ、ホールの床を一段下げてできた段差に座れる空間を作るなど、細部まで工夫された「繊細」なデザインも持ち合わせている。

現場では相当者のご苦労も多かったであろう。研究室の立場から言えば、実在物件での施工ワークショップは、学生の安全確保にも関わるため大学側の説得が大変だったであろう。工務店の側から言えば、自分たちで施工するほうが遥かに早く精度も高い。この現場は週3~5日の現場作業を総勢26名の学生がローテーションを組んで行ったが、経験の浅い学生が入れ替わり来ることは、非効率性や断続性を生んでいた。しかし現場マネジメントや現場監理を一部のリーダー学生に担当させるなど、数々の工夫と努力でそれを乗り越えることができた。

今後の建築には「箱づくり」→「場づくり」、「新築」→「改装、再生」と脱皮していくことが求められるが、それを教えられる大学の授業は、多くはない。このように現場で、場の設計、建築設計、施工のすべてが学べる機会というのは、極めて希少である。このプロセスを実現した関係各位に敬意を表し、分野別特別賞「現場教育イノベーション賞」を贈るものである。